

稲門地学会會報

巻頭言：「こんな国」と地球科学

稲門地学会会長 円城寺 守

「こんな国と戦さをして負けたんだ！」と、この国に来る度にそう思う。物資・資源のとんでもない豊富さや、国土の否応のない広大さによる諦観（呆れ）からか。文化程度の違いや人心の荒廃による侮蔑感からかもしれない。人命を扱う際の矛盾だらけの発想に対しての、あるいは、エネルギー消費方法の無神経さに拠っているのかもしれない。しかし兎も角、「こんな国」は大きく前に立ちほだかる。

今年度、そんな「こんな国＝合衆国」に滞在し、ほぼ 1 年が過ぎた（間の 3 ヶ月はカナダに居たのだが、いろいろな意味で共通点の多い両国だから、ここでは一緒にしてしまおう）。そして改めて、そんな国から感じたことの一つ、これまでの何回かの訪問で気になっていたこと、を記してみよう。「こんな国」の驚きの一面である。断るまでもないが、この広大な国土の極々一端を、極めて短時間に眺めただけのことである。偏ったというよりもある一面だけについての感想ではある。

この国の国立公園内は実によく管理されている。厳しく統制されている、といってもよい。自然の景観や歴史的な見所、観察事項などについての科学的説明が、配布資料として看板として、本当によくできている。林道・木道・舗道はもとより、看板やごみ回収箱の整備、などなど・・・おそらく、これは、家庭教育・学校教育・社会教育の幅広い成果であり、さらにこれが次なる教育効果を生み出している。園内の環境はよく整備されていて、その分規制も相当なものだ。ごみなどを棄てると厳しい処罰の対象となる（翻って、日本の国立公園はどうであろうか。ごみ・悪戯・環境整備、どれをとってもお粗末としか言いようがない。科学教育的看板や説明など、最近でこそいくらか登場してきてはいるものの、お座なりで、苦笑するような間違いもよく目立つ）。

勿論、公園以外のところで、恐ろしいまでに汚れている場所は、この国にも沢山ある。一般の街や通りの煩雑さは公園とは対照的だ。案外、巷では大部分がそうかもしれないのだが、その分、その乖離には啞然とする。そのギャップには酷い矛盾を考えさせられる。しかし、隔絶されたこの世界だけでも、ほっとさせられる部分ではあるのだ。

国立公園の Park Ranger の説明は中々のものだ。一般的でありながら専門性も失っていない。その知識は多方面に渡っており、奥も深い。対象とする分野も、生物科学・地球科学はもとより、天文学・地理学・環境科学・歴史科学と実に幅広い。博学の素養を有していて、博士号位は大抵持っている。親切で時に厳しく、考え方もしっかりしていて、そのうえ人格者が多い。説明するときの明朗さや話し方にはユーモアのセンスも溢れている。みごとなエンターテイナーなのである。Park Ranger は少年少女の憧れの的であり、幼年時から高学年に至るまで、将来なりたい職業の No.1 であるとも聞いた。むべなるかな、である（早稲田大学でもあのような講義をしてみたいものだ・・・と、つくづく思う）。

国立公園の Park Ranger が公園内の諸事や関連知識に明るいのは当然である。しかし、売店のおばさんやら整備のお兄さんまでが、一般にかなりのところ、これらに通じているらしいとなると、話は少々異なってくる。一寸した質問や説明に真的を得た会話が返ってくるのだ。国立公園に限らない。小さな公園でも、一寸したお土産屋でも、同様である。スーパーマーケットの親父からプレートテクトニクスやら地震やら DNA の話が普通に飛び出してくるのだ。しかも大抵は内容を正しく理解していて、その方面の会話が対話としてきちんと成立する。全部がそうではないだろうとは思いますが、たとえ一部でも、出てくると、はじめは少々あわてて、次に愉快になり、そして羨ましくなる（一体、日本の観光地で、GS やスーパーで、売り場のお姉さんや公園を掃除している人たちが、一般にこんな会話をするだろうか？ 残念なことに地球科学の最近の卒業生に化かして、こんなにきちんと対応できるかどうか怪しいものだ）。

奇妙な「風習」や「慣習」が現存し、『世界のお巡りさん』気取りの矛盾だらけのこの国ではあるが、その底辺に広く行き渡っている（かにみえる）この知的好奇心と諸知識に対する関心の高さは、多分「教養」といっても良い。たとえそれが偏狭な郷土愛、瑣末な愛国心から生じたものだとしても、羨ましさを禁じ得ない。

「地学専修」が始まった 40 年ほど以前と現在とでは、確かに取り巻く状況が随分と変わった。当時は、日本においても多くの鉱山が活発に稼働されており、そのための生産の場、すなわち就職先も、同じような方向に多くの窓口を開けていた（今回滞在したカナダの状況が往時の日本によく似ている）。当時は、石炭山も石灰石山も、石油田ですら、まだまだ元気だった。ダムも盛んに構築されていた。地質学や鉱物学の、学問としての面白さもさることながら、それを生涯の仕事に結びつけ、生計に結びつけ、そのための地質に多くの人々が関心を持ち、就職先も広く開けていた。実際、この稲門地学会の多くの先輩が各種の「鉱山（やま）」に向かって巣立っていった。

日本には、採掘可能な資源は殆どなくなった。鉱山が実質的に零となった今日、地球科学専修の取るべき道は何か。早稲田大学地球科学専修にあって、どのような教育がなされるべきか。現今の卒業生の就職先の実態を見ていると、専門の学生をそれほど（毎学年、約 50 名）輩出する必要はないとも映る。

しかし、日本は火山国であり、地震国でもある。台風や土砂崩れも多い。温泉や地熱や地下水など、生活に密着した地球科学的現象には事欠かない。これほどまでにも、災害や資源（生活資源や観光資源までも含めて）や地球科学的事象と深いつながりがある国も珍しい。日本でこそ、多くの国民が地球の諸現象に関心を持ち、その環境を理解し、新たな状況に対処できる・・・そんな広範な教育をすべきではないだろうか？

この「稲門地学会」も、教育界・官界・実業界などで活躍する大層幅広い先輩たちを擁するようになった。教育学部を卒業し、深い専門に根ざした集団がいる。一方、就職先は地球科学といささか離れていても、卒業生が豊富な知識や理解を持って、この社会で先導的役割を果たしていく部分は沢山残っている。地球科学的なものの見方考え方が、これから益々重要になってくることであろう。

会員諸兄の更なるご鞭撻ご協力ご支援をお願いする次第である。

(2008 年 3 月 1 日 Colorado 州 Colorado Springs にて、坂会長より引継ぎの連絡を受けて・・・)



説明する Park Ranger
(Mesa Verde National Park, Colorado)

教室だより

地球科学専修主任 小川 誠

この記事が皆さんのお手元に届く頃には主任を円城寺先生と交代していますので主任としてこの記事を書くのは最後になります。さて大変残念、かつ寂しいことですが皆様ご承知のように坂幸恭先生(名誉教授)は2007年度をもって退任されました。2008年3月1日の最終講義は立ち見が出るほどでしたし、それに続く新宿ヒルトンホテルにて行われたパーティーも大盛況で、世代の隔たりなく多くの卒業生、学生から慕われ、尊敬されている先生の人気の一端が伺えました。最終講義は、わかりやすい説明はもちろん、パワーポイントのセンスの良さも坂先生らしく、衰えない『坂』節にまだまだ講義を担当していただきたいと思ったのは私だけではないと思います。

また既に手にされた方も多いと思いますが、先生のスケッチを集めた画集が築地書館から「地質学者が見た風景」と題として出版されています。フィールドワーク中の坂先生が、スケッチを描いている姿が目には浮かぶようなすてきな作品です。品切れになるまえにどうぞ。雑誌「月刊ウィル」2008年9月号にこの本に関する対談の記事があります。坂先生の写真入りです。こちらもぜひご一読を。今後も体調が許される範囲で旅されるとのことですので新しいスケッチを拝見させていただきながらお話を伺えたらうれしいですね。稲門地学会の集まりが一つのよい機会ではないかと思えます。

教室では坂先生の後任として、2007年度まで助手をつとめていた太田亨博士を専任講師として迎えました。太田博士は九州大学を卒業後博士課程から坂先生の下で研究を続けており、長年教室の中心であった坂先生(坂研究室)の流れを引き継いでいただけるものと期待しています。まだ30代前半ですから、新しい試み(教育、研究ともに)もきっとあるでしょう。ご期待ください。

その太田さんにかわって曾田祐介博士(第32期、高木研)が助手として加わりました。3年間の限られた任期ですが、学生の兄貴分としてまた若い研究者として良い雰囲気教室に吹き込んでくれることを期待しています。2008年度は、教授6人、准教授1人、専任講師1人、助手の高橋昭紀博士(平野研、第31期)、井出裕介博士(小川研、第34期)、曾田祐介博士と卒業生でもある職員の米持さん、薄片室の岩崎さん、学生への対応など事務全般を担っている山崎さん、中村さんの体制で教育、研究にあたっています。

新任の挨拶

太田 亨

本年度より地球科学専修において専任講師に就任しました太田 亨と申します。稲門地学会会報の紙面をお借りして、自己紹介を兼ねて新任のご挨拶とさせていただきます。

私が地質学の道に進むきっかけとなったのは、中学生の時にプレートテクトニクスに関する一冊の本を読んだ時の驚きが始まりでした。その当時、私は火山・地震・大陸移動などの現象が存在することは知っていましたが、それぞれは全く別々の現象だと思いこんでいました。しかし、その本ではこれらの現象が相互に関連していることを統一的に解説していたので驚き、地質学に興味をいただきました(当時は子供でしたので、このプレートテクトニクスを利用すれば、伝説のアトランティス大陸の謎も解明で

きるのではないかと誤った方向でも興奮していました・・・)。これをきっかけとして地質学を学びたいと思い、九州大学で修士号を取得し、早稲田大学大学院理工学研究科において坂先生のご指導のもと博士課程を修了しました。その後、地球科学専修の助手を経て本年度より専任講師を勤めさせていただくこととなりました。現在は、堆積学と堆積岩の地球化学を専門とし、地質時代における日本列島の堆積環境・古気候を解析し、東アジア地域がどのように形成・発達してきたのかを復元する研究をおこなっています。

早稲田に来た当初は、地球科学専修の活気にあふれ、多彩な様子に驚いたのを今でも覚えています。この一員として迎えていただいたことを誇りと思っております。その一方で、弱輩者でありながら坂先生の後任という立場に就いた重責をひしひしと感じている毎日です。坂先生のフィールド・ワークを重んじ、地質学の基礎を大事にする伝統を継承することが自分に課せられた役割であると日々、肝に銘じております。

最後になりましたが、今後も地球科学教室の発展に貢献できるよう従事していきたいと考えています。まだまだ至らない点が多数あると思いますが、よろしくお願いいたします。

研究室だより

平野研究室

富田 皓之（第 42 期）

今年度の平野研究室には PD 1 名、博士課程 4 名、修士課程 6 名、学部生 4 名の計 15 名が在籍しています。平野弘道先生の指導のもと、地球環境変動や生物の変遷についてなど、古環境学や古生物学の研究を行っています。それらの研究に欠かすことができないのが、何といても化石です。はるか昔の地球を実際に生きていた生物の化石は、我々に当時の様子を語りかけてきます。過去を読み解く鍵と言っても過言ではないでしょう。現在、平野研究室で扱っている化石は、アンモナイト、イノセラムス、脊椎動物などの大型化石のほか、花粉・孢子、渦鞭毛藻、放散虫などの微化石です。また、最近では有機物質中の炭素同位体比を測定するという化学的な手法もとられるようになりました。アンモナイトをはじめとした大型化石の一部は、我々の研究室の前の棚に置いてあるので、機会があれば一度ご覧になってみてはどうでしょうか。

さて、我々の研究の根幹ともいえる化石ももちろんタダで手に入るわけではありません。自ら野外に出向き、化石を採取してくる、いわゆるフィールド調査が不可欠です。平野研のフィールドは、北海道を中心に、日本はもとよりアジア大陸にも及び、現在もその範囲は拡大する一方です。我々は夏になればフィールドに赴き、自然の中に身をゆだねます。それは同時に、太古の世界と向き合うことに他なりません。過去と現在、双方の自然の中で、悠久の時の流れを肌で感じ、実際にそれを地層の積み重なりから目にすることができます。自然の偉大さとも言うべきものを目の前にしたときの思いは筆舌に尽くし難いものがあります。研究室内では、フィールド調査で得られたデータの処理やサンプル処理を行います。決して楽な作業ではありませんが、個々人の弛まぬ努力と熱い議論の応酬により、日々研究が行われています。過去を紐解き、現在に繋げる。我々平野研一同は、室内外において日々精力的に活動を行っています。

円城寺研究室

木下 容子 (第 42 期)

4 年目にして野外調査方法が曖昧だった私たち 4 年生に、暖かく手を差し伸べてくださったのは、鉱床学研究室教授の円城寺守先生でした。私は 3 年生まで、事前勉強不足による知識の低さや、学生や先生の巡検に対する温度差や、単に自分の巡検に対する熱意の低さで、巡検に行っても「与えられたことをやるだけ」でした。しかし今年度に入り、巡検が一気に楽しくなり、採集することの面白さ、調査後の達成感を味わえるようになりました。今年度は円城寺研究室の愉快的仲間 6 人と先輩と先生で 2 回の野外巡検に行きました。1 つは城ヶ島地質調査巡検、もう 1 つは乙女鉱山で水晶と砂金の採集でした。城ヶ島地質調査巡検は、城ヶ島に行き、グループに分かれて地質図を作成し、過去三浦半島周辺にどのような力が加わったのかということを考えてというものでした。先生も先輩も、クリノメーターもきちんと使えなかった私たちを見捨てず、私たちの目線に合わせて「マクロな視点で地形を見る」ということを教えてくださいました。地層に目を近づけて観察することも大事ですが、離れて遠くから地形全体を見渡した時に、断層の入り方や、地層の縞、走向・傾斜の変化などが自分の目で確認できたときに、私は初めて「おもしろい」と思えました。そして、自然がもたらす力はものすごいということも実感できました。乙女鉱山に行ったときは、比重選鉱による砂金採集に挑戦しました。みんな真剣にはまってしまう、2 時間も無言のまま各々試行錯誤していました。私は 1 粒採集できました！私の研究室メンバーはとても愉快で、巡検のときは B B Q や飲み会をしながら大いに笑い、将来を語りあったり、円城寺先生からはいつも高尚雑学を聞かせていただけます。地球科学の興味を高めることができたのは、この研究室の先生と、メンバーのおかげだと思っています。卒業研究もこの調子で頑張りたいと思っています。

小笠原研究室

五十嵐 美奈 (第 42 期)

どうもこんにちは。小笠原研究室こと、地球物質科学研究室です。

研究室で扱うのは、地球物質科学と銘打っている通り、地球を形作る様々な岩石や鉱物。その中でも特に、プレート運動に伴う大陸表層物質の沈み込みによって形成された『超高压変成岩』を扱っています。昨年、四国でも名古屋大のチームによって、火成岩中にマイクロダイヤモンドが発見されましたが、本研究室ではそれよりも以前から『超高压変成岩』に含まれるマイクロダイヤモンドにスポットを当てていました。『超高压変成岩』とは、地上では不安定なダイヤモンドやコース石が含まれるのが大きな特徴です。しかし、岩石の組織や組成から、『超高压変成岩』の原岩は大陸表層物質と考えられています。ここからつまり、「もともと大陸表層物質であったものが地球内部まで沈み込み、ダイヤモンドなどが形成されてから、また上昇してきた」ということがいえるのです。『超高压変成岩』は、地球内部の情報を保持したまま上昇してくるので、そこから地球内部の物質循環の情報を得ることができます。

本年度のメンバーは、学部 4 年 3 人・3 年 2 人で構成されています。毎度おなじみ少数精鋭ではありますが、非常に熱心な小笠原先生の指導のもと、メンバー一同日々奮闘しております。また、大学院生がいないという厳しい環境の中でも、時折 OB・OG の方々が訪れ、アドバイスや励ましの言葉をくださいます。今後も切磋琢磨しながら、研究に精を出していきますので、温かく見守っていただければ幸いです。

高木研究室

原田 尚（第 42 期）

今年度の高木研究室は PD が 1 名、修士 2 年が 2 名、修士 1 年が 2 名、学部生が 5 名という人数構成になっています。メンバーの取り扱っているフィールドは三重、長野、淡路島、福島、神奈川、山梨、富山、愛媛などと日本国内に広域に分布しており、研究のテーマはこれまでと同様、断層岩やマイクロクラックなどを用いたテクニクス解析が主です。研究の手法としては、フィールドにおいてサンプルを採取し、研究室にて作製した薄片を観察、測定するという形式が多いですが、中には長期間フィールドにおいて調査を行い、データの収集を行なっている人もいます。それぞれが楽しく研究を行なっています。

研究室内の雰囲気はとても和やかで、先輩方はとても親切に学部生をリードして下さっています。週 1 回行なわれているゼミでは、毎回発表者は研究報告、文献紹介などを行い、高木先生を中心に学年の垣根を越えて活発な意見交換が行なわれています。特に高木先生や先輩方の発表やアドバイスなどは非常に参考になる点が多く、毎回とても刺激的な時間を過ごしています。

さて、早いもので今年度も後半に差し掛かりました。メンバーはそれぞれの研究の成果を出そうと頑張っています。OB/OG の皆様、大学付近にお越しの際には是非研究室にお立ち寄りいただき、研究や就職についてのアドバイスを頂ければと思います。また、高木研究室の演習を履修された 3 年生、高木研究室に興味をお持ちの 1～2 年生の皆様も研究のことや、その他にも何か質問などありましたらどうぞお気軽に研究室にお立ち寄りください。

小川研究室

～我輩は小鳥である～

橋本 了哉（第 42 期）

小川研究室。そう、それは小川誠を中心とした日本屈指のインテリジェンス集団だ。粘土鉱物や多孔質物質を研究対象とし、物理・化学の知識を存分に駆使して世界に先駆けた研究を行っている。笑いや涙はない。我々の生活を占めるもの、それは研究のみだ。

ここで、この研究室の説明にあたり小川誠という人物について語らずにはいられないだろう。小川研をひとえにまとめあげる者、これこそが小川誠だ。師の持つ創造性と無限に広がる世界観はこの地において他の追随を許さない。師の思考—世界—の中で連なり続ける様々な興味がこの研究室の真髄だ。多岐にわたる師の関心から構築される研究へのアプローチは私たちに研究の本質・深さを知らしめる。しかし、その超越性かつ突飛さゆえに一見不可能を感じさせることもある。諸君も小川研に所属すればそのことがわかるだろう。だが、そんな時は一歩立ち止まって欲しい。そして思い出して欲しい、我々の歩く速さと師の速さは異なった次元にあることを。師の中で構築されるものはまさに合理的、晴れ渡る空のごとく澄み渡っている。そして、私たち生徒はいわばそんな晴天の中を飛び回る小鳥だ。小川誠という太陽に照らされながら、主食の研究を糧に考える力を養っていく小鳥だ。

さあ、諸君も来てみないか、こっちの世界に……。この世界の入り口は諸君のすぐそば、6-213-2 にある。

フェイガン(Fagan)研究室

佐久間 祐介・高田 浩介・根岸 香織 (第 42 期)

2005 年度に発足したフェイガン研究室は、現在、修士 3 名、学部生 7 名の計 10 名が在籍しています。我々の研究対象は隕石であり、特に月・火星・小惑星などを扱っています。隕石は、人間が実際に手に取って調べる事ができる主要な地球外物質です。よって、隕石の形成や変質過程を研究する事は、太陽系の歴史を解明する手がかりとなります。我々はその謎を解き明かすべく、偏光顕微鏡を用いたサンプルの観察、EPMA による化学組成の分析など、様々な手法を用いてアプローチをしています。

我々の研究室の雰囲気はとても自由で、卒業研究も個人のペースで進める事が出来ます。現在、学部生は卒業研究においてテーマごとに 3 グループに分かれ、グループごとにそれぞれのペースで研究をしています。

また、フェイガン先生の授業は基本的には英語ですが、最近は先生の日本語も流暢になり、我々学生と日本語で話す機会も徐々に増えてきました。文献や論文発表なども全て英語ですが、わからなかった時や、研究が行き詰まった時でも、とても面倒見が良い先生は、まだまだ未熟な我々に根気強く指導して下さいます。そして、修士の先輩方もとても優しい方ばかりで、我々学部生が困っている時はいつも相談にのって下さいます。

研究室のメンバーは個性的な方々が揃っています。とても優しい方ばかりなので、少しでも興味があれば、1-3 年生の皆さんも気軽に立ち寄ってみてください。楽しみに待っています。

大師堂研究室

赤松 秀一 (第 42 期)

2006 年度より大師堂研究室にて卒業研究を行うことが可能となり、現在研究室には博士課程 3 名、修士課程 4 名、学部生 4 名の計 11 名が在籍し、研究を行っています。

研究分野は電波天文学であり、変動性電波源やトランジェント電波源と呼ばれる突然強い電波を出す天体の発見と、その観測に用いられる電波望遠鏡を開発しています。

現在主に稼働しているのは、栃木県那須塩原市早稲田大学那須パルサー観測所に設置されている直径 20m の電波干渉計 8 基と直径 30m の電波望遠鏡 1 基です。交替で現場に赴き、調整や日々発生する問題の解決に力を注いでおります。

大師堂研究室では観測に必要な装置の開発も自分達で行っています。そのため、観測するのに必要な数学や物理学、コンピュータープログラミングや電子回路など、多岐に渡る学問を理解し利用する事が必要となります。

数学好きな大師堂先生の下、突然難問を出されて頭を悩ませながらも研究室メンバー一同日々熱心に研究に励んでいます。

太田研究室

長原 潤一（第 42 期）

今年度の太田研究室に机を並べるのは修士課程 4 名、学部生 3 名。明るい人ばかりで退屈を感じることがありません。研究と談笑の他に何も無い、理想的な研究室といえます。

・・・唐突に『今年度の太田研究室に～』とはじめてしまいました。去年までの稲門地学会会報には載っていないこの『太田研究室』という見慣れない名称の説明をしなければならないようです。分かり易い資料がここにあるので引用しておきます。（以下引用）

「今年度の坂研究室は PD 1 名、修士課程 2 名、学部生 5 名の計 8 名です。男ばかりですが、楽しくやっています。（略）坂先生、PD の加藤さん、助手の太田さんの指導のもと、一致団結して研究活動を行っています。」（引用終わり）

以上は一昨年稲門地学会会報の研究室便りの一部です。昨年ご退官された坂先生に代わり今年度から、『助手の太田さん』が太田先生として、引き続き研究室での指導をしているということがご理解いただけたと思います。一同、坂幸恭という軍旗の下に集っただけあり、一筋縄ではいかない猛者揃い。それを束ねる太田先生は若く才気に溢れ、研究室に活力をもたらしてくれています。嘘だと思えば、どうぞ遊びに来てください。一升瓶なぞ持参なら、太田研究室の本領、目に物見せて差し上げましょう。

最後に、太田研究室では堆積学と堆積岩岩石学を扱っています。堆積岩からは地球表層の様々な情報を読み取ることが可能です。この話は長くなるので、研究室前のポスターを見てください。

OB・OG 便り

今年度の OB・OG 便りは、坂研究室の卒業生の方々に、この春ご退任なされました坂先生との思い出を綴っていただきました。

脚絆

渡辺 拓美（第 6 期）

ひどく生意気な学生であった私はどの先生からも疎まれていた。その私が坂先生のところで卒論をやりたいと希望した。まことに広い心で引き受けてくださったのだが、さぞや貧乏くじをひいてしまったと思われたことだろう。当時、先生は一番の若手でしかも外様であった。上に気を使わなければならない先生の立場も考えず、勝手な行動をする私をどれほどもてあまされたことか。ついには卒論発表の後、飲み屋で酒をぶっかけられる羽目となった。半ば破門されたに等しい。だから坂先生に会わず顔がなくなり、早稲田からも遠ざかってしまった。そんな私が原稿を頼まれるのも、今度、助手になられる曾田さんが私の勤務校の出身で、彼の教育実習を担当したという偶然があったからである。

私は坂先生にとってはさんざんの卒業生にほかならないが、少しはかわいげのあったことも自ら紹介したい。坂先生は脚絆を必ず足に巻いて調査に出かけられた。それがとてもかっこよく思えて、フィールドにあった農協でやっと手に入れ、私も真似して愛用した。これをつけていると自分も一人前のジオロジストになれたような錯覚をおこす。当時、私は早稲田で一番のフィールドジオロジストとして密かに先生を尊敬し、憧れていたことを白状しておこう。

気骨あふれる大教授

宇田川 義夫 (16 期)

私は同期の小野剛稔君と坂研究室に所属していたが、二人とも坂研究室のゼミに参加したことがない。というのも、彼と私は非常勤講師（土木地質学）で来ていた菊地先生に卒業論文の指導を受けていたからである。したがって、坂研究室 OB とはいつても、フィールドでじっくりと指導を受けたわけではない。大学卒業後、小野君はコンピュータ関連業界に、私は建設業界に身を置いた。

私が形式的に坂研究室に所属していたといっても、坂先生から受けた恩恵は深い。大学に入って山登りと読書が好きだった私は、「岳文会」(山岳と文学の会)に入ったが、顧問の先生が坂先生であった。先生が会に顔を出すことはほとんどなかったが、それでも 1 回くらいは杯を酌み交わしたと思う。私が大学生当時、先生は 40～44 歳であり、今の自分の年齢 (48 歳) からすると、かなり若かったわけで、お酒のほうもかなり強かったと思う。北海道巡検のときも、確か登別あたりで坂先生と夜飲んだことがあったように思う。



セツケ宿ダム建設の碑にて

お酒の方ばかりではなく、先生から教わったことで特に印象に残っていることがある。それは坂先生の最終講義でもお話されていたが、「地質図は人それぞれに違ったものになる」ということで、どれが正しくどれが間違っているということもなく、「それぞれに正しい」ということである。それは坂先生の心の広いお人柄にも表れており、菊地先生から卒論指導を受ける学生を受け入れてくれたことにも表れている。また、坂先生のフィールド重視の研究姿勢は重要であると思う。

社会に出てみると、「答えがひとつ」という問題はむしろ少なく、考え方ひとつでいかようにもなる問題が多いということに気がついた。また、最近ではパソコンで数値解析のみで研究した気になっている研究者が多いが、いかに実際の岩盤を観察し、検証することが大切であることを痛感している。

坂先生はまさに早稲田大学の気骨あふれる大教授であったと思います。坂先生ありがとうございました。そして稲門地学会でまたお会いできることを楽しみにしております。

坂先生とのフィールドでの思い出

内野 隆之 (第 30 期)

私が 4 年生だった 1996 年の坂研究室は、卒論生が 11 人 (留年生も含め) の大所帯でした。研究室は自由奔放で楽しく、まるでサークルの様でした。当時の坂先生は大変お忙しく、また、ほとんど我々学生に構っておられる時間がなく、たまに研究室に来られても、すぐに出かけておられました。しかし、時間の合間を縫って、極力、我々学生とフィールドを共にして下さっていました。そこで、坂先生と一緒にフィールド調査で印象に残ったことをいくつか紹介したいと思います。私がまず驚いたのは、先生のフィールドを歩くスピードがとても速いことでした。いつも我々学生より随分前方を足早に歩かれ、「本当にもうすぐ還暦なのか？」と思ったものでした。また、先生は焚き火が大好きで、昼食時には結構盛大にやられます。「えっ、缶も燃やすんですか？」と驚きながら聞くと「当たり前だ。燃えるものは皆燃やせ！」と怒られたものでした。そして、ある時、宿泊先で一緒になった地質コンサル会社の方々と坂先生を交えて、宿の部屋で飲むことができました。その時、コンサルの方が「最近の若者の

軟弱さ」について語られていた時に、先生が「うちの研究室の学生は、天候が悪くても、山が険しくても、文句一つ言わずに朝から晩まで頑張っている。なかなか根性がある」と声高に仰せられました。「あの毒舌の先生が我々学生を褒めるなんて」とその意外な言葉に驚きましたが、坂先生の優しさを垣間見られたのと同時に「ちゃんと我々のことを見てくれているんだ。もっと頑張ろう」と思った記憶があります。

誠に失礼ながら、私は学生時代に受けた坂先生の講義内容をあまり覚えていない不屈者なのですが、今年行われた最終講義はとても素晴らしく感動しました。現在、地質系の職に就いている私にとって、「坂先生の授業をもう一度きちんと受け直したい」と痛感している今日この頃です。しかし、坂先生から教わったフィールド重視の研究姿勢は今でも私の研究の基本となっています。

先生との思い出

大竹 奈保（第 37 期）

学部・修士課程における坂研究室での 3 年間は坂先生に大変お世話になり、いろいろな思い出があります。坂先生はよく「あなたたちは、私の孫と息子（娘）の中間だ」とおっしゃいますが、私達にとって坂先生はとても優しく、たまにちょっと厳しい父親のような暖かい存在でした。

とはいえ 3 年生の時は坂先生が恐れ多く、先生に話しかけられても「はい」と一言答えるのがやっとでした。そして、当時、ヘビースモーカーであった先生はゼミ中にスパスパと煙草を吸いながらも、私たちのほうに煙が行かないように気を使って下さり、私が少し咳き込むものなら、「すみません、すみません」と慌てて煙草の火を消して下さいました。実は当時、私も煙草を吸っていたのですが、小心者の私は、「自分も喫煙者である」とは言えずに、時は流れていってしまいました。ついに 4 年生の追いコンの際に、私が煙草を吸っているのを坂先生に見つかってしまい、びっくりした顔で「あなたに騙された！！」と大目玉をくらったのです。それからというもの、猫をかぶるのはやめ、たまに坂先生が誘ってくださる昼食会では、好きな唐揚げやカツ丼を食べ、先生の残したご飯を戴いたりするようになりました。

そして、忘れもしない出来事があります。修士の時、三重県南島町（現、南伊勢町）でのフィールド調査中に、私は不注意でちょっとした騒ぎを起こしてしまったことがありました。その夜に、おそろおそろ坂先生に電話で謝罪したところ、先生は「謝るな！そこまで地質調査をしようとしたのだから、胸を張りなさい」と言って下さり、私はその言葉を聞いて涙が溢れてきました。

現在、私は中学校で教員をしております。なかなか採用が決まらない自分を一番心配し、相談に乗ってくださったのも坂先生でした。中学という異なる畑ではありますが、坂先生に一歩でも、半歩でも近づけるように努力していきますので、今後ともご指導のほどを宜しくお願い致します。新たな技術を身につけつつ、これまで地学教室で学んだたいせつな部分を地元に戻元できるよう精進してまいりたいと思います。



紀伊の海岸にて（太田亨氏撮影）

専門部会報告

資源専門部会報告

田中 隆之（第 26 期）

「鉱床地質学は典型的な総合科学である。鉱床の多くは地質時代の産物であり、火成活動、堆積作用、変成作用あるいはこれらの組み合わせに伴って生成されたものである。したがって、地質学のその他の分野—火成岩、堆積岩、変成岩の岩石学、火山学、層位学、構造地質学、鉱物学など—の基礎知識が必要である」

この言葉は、鞠子先生が書かれた「鉱床地質学」（2008 年 3 月出版）という本にある言葉です。地学教室で学び、さらに資源開発を仕事とするものにとって、非常に味わいのある言葉と思います。鉱床学の授業の内容だけでなく、地学教室で学んだ様々な他分野の知識や研究が、現在の私には非常に大切なものとなっていることを実感しています。

資源専門部会は、資源関連・地質関連の仕事に関係する OB・OG により構成され、1 期生の諸先輩方をはじめとして、50 名以上の部会員からなっています。主な活動は、年 1 回の資源専門部会を開催し、情報交換・近況報告を行い、親睦を深めるという活動ですが、普段は、自分の仕事ばかりを追いかけている（追いかけている？）ような状況の中で、資源専門部会では、幅広く OB・OG の方々とお話をする事ができ、貴重な交流の場となっています。

現在の世界情勢からは、資源分野への注目度が日々高まっている状況ですが、資源専門部会の諸先輩方は、資源・地質関連の企業・官公庁・大学等で、第一線で働かれている方ばかりです。その経験や知識、特に発展途上国での体験談などは、学生の方々にとっても貴重なものなろうかと思えます。今後は、是非学生の方々にも参加していただければと思います。

冒頭にも書かれてありますが、鉱床地質学は、さまざまな学問のネットワークによるものです。それと同様に資源専門部会も、これからますます、地学教室の OB・OG のネットワークを拡大させて行きたいと思っている今日この頃です。

鉱物専門部会報告

林 政彦（第 12 期）

鉱物専門部会では、山崎淳司氏と編集・発行している雑誌「鉱物情報」に協力し、年に 1 回、鉱物の情報交換を目的とした研究会を開催しているが、今年は 8 月 9 日（土）に行った。この会では、毎回、鉱物の頒布や、国立科学博物館の松原聰氏による、昨年よりこれまでの 1 年間に、わが国で発見され命名された新鉱物と、わが国の新産鉱物についての講演が行われる。今回の講演によると、新鉱物は、幌満鉱（北海道様似町幌満： $\text{Fe}_6\text{Ni}_3\text{S}_8$ 正方）、様似鉱（北海道様似町幌満： $\text{Cu}_2\text{Fe}_5\text{Ni}_2\text{S}_8$ 正方）、カリ鉄パーガス閃石（三重県亀山市加太： $\text{KCa}_2(\text{Fe}_4\text{Al})\text{Si}_6\text{Al}_2\text{O}_{22}(\text{OH})_2$ 単斜）、田野畑石（岩手県田野畑村田野畑鉱山： $\text{LiMn}_2\text{Si}_3\text{O}_8(\text{OH})$ 三斜）の 4 種、新産鉱物は、ダイヤモンド、マルドン鉱、クブチク鉱、ジョナッソン鉱、クラウト鉱、ラベンダー石、アンセルメ石、ナビア石、フランシスカン石、苦土斧石、フェリタラマ閃石の 11 種。なかでも、フェリタラマ閃石は、タラマ閃石と同一産地の群馬県下仁田町茂垣で発見されたが、肉眼的にはタラマ閃石と区別ができないという。新鉱物のカリ鉄パーガス閃石も角閃石の一種であるが、今後は角閃石の化学分析を行うことが必要性であることを強く感じた。なお、群馬

県下仁田町茂垣において、わが国で初めてタラマ閃石を発見したのは、同期の田辺克幸氏である。鉱物専門部会に興味・関心のある方は、林（mhayashi@aoni.waseda.jp）までご連絡ください。

会計からのお知らせ

加藤 進（第 15 期）

今回の会報では、任期の途中年度ですので会計上の現状報告をさせていただきます。現在稲門地学会会費残金は、ざっとですが 100 万円強となっております。2 年前には、170 万円と報告いたしました。そこでもご報告いたしましたが、収入支出は以下の通りです。

支出項目には会報・総会開催通知・返信用葉書等々の印刷・用紙代に例年 40 万円程度要しております。またその他には新入生・卒業生に対して合計 5 万円のお祝い金を拠出しています。ですが一方で収入に関しては、卒業年次の会費と卒業後 20 年の会費による収入は例年 20 万円弱の現況です。このまま推移すれば 2 年前には 7 年後とお知らせいたしましたが、そのまま 2 年間内容が変わっていませんので、5 年後に会は資金的に破綻します。ご提案としましては、郵送費が多くかかっています。この分を、メールによる連絡に変えていけば、費用的には楽になっていくのではないかと思います。

という事で、卒業生の皆さまには会の維持存続のために会費納入をしていただけないと今後の会の活動ができなる状況です。是非ご理解をいただきご協力いただけたらと思います。よろしく願いいたします。

庶務からのお知らせ

来る 12 月 27 日（土）16 時より「西北の風」にて 2008 年度総会を開催いたします。詳しくは総会案内をご覧の上、同封の葉書にて出欠をご連絡下さい。

2007・2008 年度 稲門地学会役員・幹事

役員

- [会 長] 円城寺 守 (教職員)
 [副会長] 原 雄 (2 期), 林 政彦 (12 期)
 [庶 務] 米持 賢治 (教職員・15 期)
 [会 計] 加藤 進 (15 期), 戸高 法文 (12 期)
 [監 査] 平野 弘道 (教職員), 高野 良一 (1 期), 筑紫 恒男 (2 期)

幹事

- [教職員] 坂 幸恭, 米持 賢治
 [1 期] 篠田 晋治, 高田 徹夫 [2 期] 筑紫 恒男, 古川 雅彦
 [3 期] 川島 眞一 [4 期] 石田 吉明, 篠崎 貞
 [5 期] 伊藤 和男, 酒井 健, 福田 正光 [6 期] 市毛 芳克, 三宅 克行
 [7 期] 中泉 徹 [8 期] 山崎 次郎, 若林 直樹
 [9 期] 稲田 敬, 池田 則生, 村野 隆 [10 期] 大橋 信介, 塩澤勝太郎
 [11 期] 品田 進司 [12 期] 安藤 寿男, 戸高 法文, 林 政彦
 [13 期] 泉谷 泰志, 佐野 浩, 永井 保弘 [14 期] 野々口 稔, 村松 春彦
 [15 期] 加藤 進, 小池 豊, 宮下 敦 [16 期] 磯上 篤生, 宇田川義夫
 [17 期] 市川 昌則, 長谷部直人 [18 期] 田中 義洋
 [19 期] 金澤 義人, 古野 正憲 [20 期] 嘉戸 章江, 瀬谷 正巳, 西堀 一彦
 [21 期] 風間 武彦, 加藤 潔, 森岡 右伍 [22 期] 大森 聡一, 塚田 裕子
 [23 期] 堀田 照久, 安田有希子 [24 期] 安藤 生大, 小林 健太
 [25 期] 荒木 康彦, 松田 達生, 三浦 玲子 [26 期] 梅田 朝美, 山上 順民, 頼 雨新
 [27 期] 石井 明仁, 田島 丈年, 三輪真一郎 [28 期] 中村 一夫, 野口 眞弓, 山本 浩万
 [29 期] 島田 耕史, 高橋 一晴 [30 期] 小林 靖広, 曹 奎煥
 [31 期] 浅井 志保, 安藤 康行, 太田 雅仁 [32 期] 水野 崇, 梶川 直
 [33 期] 馬場 恵里, 細見 幸信 [34 期] 向 充美, 吉岡 伸浩
 [35 期] 今村 恭子, 井上 恭豪 [36 期] 大泉 満彦, 田中 智史
 [37 期] 加納 大道, 坂 秀憲 [38 期] 上村 哲哉, 清家 一馬
 [39 期] 安原 健雄, 菅原 拓夫 [40 期] 角田 勝, 岡崎 一浩
 [41 期] 山田 哲史, 吉田 学 [42 期]

運営委員

- [総 務] 篠田 晋治 (1 期), 木村 純 (2 期), 原 雄 (3 期), 川島 眞一 (3 期)
 [総 会] 井岡 大和 (3 期), 塩澤勝太郎 (10 期), 林 政彦 (12 期), 田島 丈年 (27 期)
 [名 簿] 松村 春彦 (14 期), 米持 賢治 (教職員・15 期)
 [会 報] 宮下 敦 (15 期), 曾田 祐介 (32 期)

稲門地学会

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

早稲田大学 教育・総合科学学術院 地球科学教室内

TEL: 03-3208-8473 FAX: 03-3207-4950

http://www.dept.edu.waseda.ac.jp/earth/index_j.html

e-mail : earth@edu.waseda.ac.jp

編集代表 : 曾田 祐介 (教職員・32期)

編 集 : 宮下 敦 (15期)

題 字 : 大杉 徹 (名誉教授)